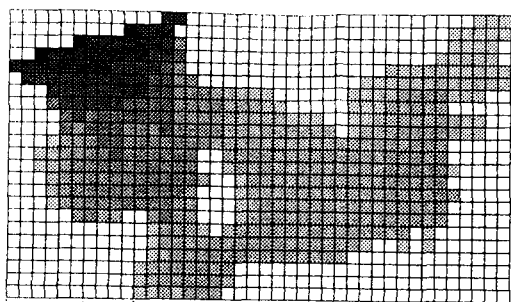
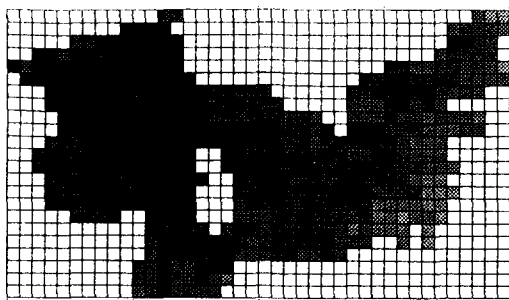


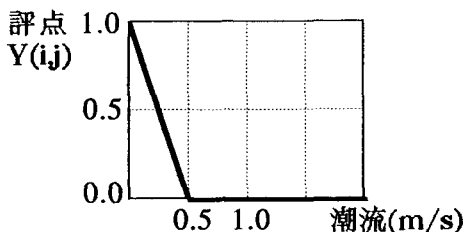


(図-2) 未超過確率90%波高分布図



(図-3) ディンギーヨットの利用適正度分布

このようにして求めた各評価項目の観測値 $X(i, j)$ を、評価項目ごとに設定した評点 $Y(i, j)$ に換算した。例えば、ディンギーヨットの場合、潮流は図-4に示すように、活動可能範囲を0.5 (m/s)以下(初心者でも利用可能なように)とし、水域の潮流が0~0.5 (m/s)の場合、1.0~0の評点を直線的に与え、0.5 (m/s)以上の場合、評点を0とした。他の評価項目についても同様に、活動可能範囲から評点を0~1.0の間で求めた。ただし評点には、重み係数 K を乗じることにより、水域用途と評価項目の関連度を考慮するものとする。



(図-4) 潮流の観測値と評点の関係
(ディンギーヨット)

3. 博多湾内のディンギーヨット利用適正度

図-3は、本解析手法を用いた水域用途の評価の一例として、ディンギーヨットの利用適正度の平面パターンを示したものである。図は色が濃い水域ほど適正度が高いことを示している。ディンギーヨットに係わる評価項目としては、波高、水質、利用関連度、眺望度を選出し、重み係数は全て1とした。この結果と現在の湾内のディンギーヨット活動状況を比較してみると、湾内南東部の沿岸は、港湾関連施設が整備されており、ディンギーヨットの活動水域としては適さず、解析結果と現況はほぼ一致している。また湾内西部の水域は適正度が高く、湾内西部及び北東部のマリーナ整備なども有益であろう。

4. あとがき

本研究の解析手法を用いた、博多湾内におけるディンギーヨットの利用適正度の平面パターンは、現況と比較してはば妥当なものであった。評価項目、評点、重み係数を適正に選定することで、本解析手法により水域空間の本来の特性が評価可能であると言える。今後の解析で、平面パターンの重ね合わせの際に適用する、重み係数の与え方などの検討を進め、また他の水域用途の適正度についても、講演時に発表する予定である。

【参考文献】

- 1) 長尾、藤井、的野(1993): 沿岸域の空間価値を考慮した用途区分ゾーニングに関する研究、日本沿岸域会議論文集、pp. 41~51
- 2) 運輸省港湾技術研究所(1993): 美しい港湾景観の形成をめざして—その考え方と港湾景観計画のポイント—